

暗い渴求

田村泰次郎



暗 い 渴 き

© 田村泰次郎 昭和四十年

昭和四十年八月十日 第一刷発行

四二〇円

著 者 田 村 泰 次 郎

東京都文京区音羽町三ノ一九

発 行 者 野 間 省 一

東京都文京区大塚坂下町二一四

印 刷 所 豊 国 印 刷 株 式 会 社

製 本 所 有 限 会 社 文 信 社

発 行 所 株 式 会 社 講 談 社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振 替 東 京 三 九 三 〇
電 話 東 京 二 一 二 (大代表)

落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

暗い
渇き
目次

蝶の巢

5

鷗
(かもめ)

25

暗い渇き

43

不死鳥

63

再会

85

忍者の町

109

その代償

127

白い歯

145

見えない傷

167

スモッグのなかの孤独

189

一つの日没

211

短刀
(どす)

235

構成
吉田幸子

装画
林武

蝶
の
巢

どぶ板は、乾いていた。それはたしかにどぶ板としか思ひようのないほど、よごれて、朽ちていた。が、そこにどぶが流れているわけではない。地面のくぼみがあつて、いつもは陽のささめ、じめじめとしたところが、このところ、ずうとつづいている異常乾燥で、土埃をたてるほど干からびている。どぶ板の腐朽の程度は、いかに長くそれが水浸しになつていたかを、もの語っていた。

アパートの部屋は、すぐわかつた。廊下に炭俵や、漬物桶の出ている、鼠の巢喰つていそうな老朽アパートであることを見るまでもなく、さっき、どぶ板を一見したときから、山瀬久吉の心はかげつていた。こんな場所に住む女に、十万という金を要求することに、無理を直感した。だが、相手はその金額を、すでに客からとつて、店をやめたのである。その金がどうなつたか、それは山瀬久吉にはわからないが、一度は彼女のふところにはいったことはまちがいない。

「ご免下さい」

最初は、おとなしい声をだすことが必要である。荒っぽい声や、気味の悪い声をだしたのでは、相手はドアをあけてくれない。ここをつきとめるまでの苦労は、いつものことながら、容易ではなかつた。彼のような、そのことを職業とする者でなかつたら、途中で投げだしているにちがいない。ひと並みはずれた根気と、もう一つには、女から金をとり返すという自分の職

業についての執念である。ひと並みはずれた根気も、その執念から生れてくるといったほうが、正確かも知れない。彼の執念は、一朝一夕に生れたものではない。

「誰だい？」

鋭い、刺すような返答が、部屋の内部から聞えた。ただの男の声でないことは、とっさに久吉にわかった。そこは職業的なカンである。彼はもう心で身構えていた。獣が獣に立ちむかう気魄を、全身にみなぎらせた。

荒々しく、投げやりなあけ方で、なかからドアがひらかれた。予期どおり、眼つきの陰惨な感じのする、二十七、八の男が、そこにあらわれた。衿に赤い布を巻いて、人造皮の黒いジャンパーを羽織った、痩せ形の男である。

「あのう、ここは、宮崎新子さんのところじゃないでしょうか」

山瀬久吉は、こころ持ち、背中をかがめ気味にしてたずねた。

「そうだよ。なんだね」相手は、山瀬久吉の頭のとっぺんから足さきへ、視線をはいずりまわすようにして、無愛想に答えた。「新子は、いま、留守だが、一体、なんだね」

「どこへお出かけですか」

久吉のつもりでは、いつ頃帰るか、その時間を知リたかった。近くへ出かけたのなら、待とうと思った。この場所をつきとめるのも、一通りの苦勞ではなかったが、荒川区のこんな端っこまで、わざわざ、新宿から訪ねてきたのを、無駄足にしたくなかった。こんなところまできたのは、久吉には、生れてはじめてといつていい。

「どういう用件なんだい」

「ちょっと、新子さんに……」

「だからさ、用件を聞いてるんだよ。おれは、新子の亭主だが」

宮崎新子に亭主がいるとは、聞いてはいない。店の客たちには、ひとり者のようにいつていても、店へはほとんどの女が、入店の際、ほんとのことを話している。たとい、話さなくても、いずれは店には、その女の身上が、自然に知られてしまうからだ。れっきとした良人でなくて、単に情夫にすぎないだけの男でも、マネージャーや、ボーイたちには知られてしまう。あとでバツの悪い思いをするよりも、それならいつそはじめから話しておいたほうが、氣持がらくだと、彼女たちが考えるのは当然である。

「ああ、そうですか。それなら、あなたにお話してもいいんですが、私は『ブルー・パレス』からきた者ですけど、新子さんに……店へお金を入れてもらいたいと思ひまして……」

山瀬久吉は、一段と鄭重な口調になった。いまのこのときは、鄭重なほど、相手にあたえる威圧感の大きいことを、経験から計算していた。

「なんだって、うちの奴は、もうとつくに、『ブルー・パレス』はやめたじゃねえか」

「ええ、それで新子さんが、すでにお客から集金ずみのお金を、店へ入れていただきましたいで」

「ふざけるなっ」

男は突然、底力のある、ドスのきいた声でどなった。

「なにを証拠に、そんないいがかりをつけやがるんだ。おれはうちの奴から、そんな話を聞いてねえぞ」

「でも、お客のほうじゃ、そういつてます」

「帰れっ。二度ときやがると、ただじゃおかねえぞ」

「新子さんは、いつ頃、帰るんです」

「うるさいっ」

妻いきおいで、男は久吉をつきとばし、ばたんとドアを閉めた。不意だったので、久吉はうしろにのけぞり、後頭部を壁にぶつけた。モルタル塗りだったので、大怪我はしなかったが、それでもしばらくは眼さきが眩んで、身体の重心がとれなかった。もとに戻るのに、数分間を要したようだが、山瀬久吉はそれくらいのもので、しっぽをまいて逃げだしはしなかった。

彼はそれから二時間あまりも、そこに立っていた。隣室の連中が、たびたび、廊下へ顔をだして、げげんそうに彼の顔をのぞいた。そんなことは慣れていたので、彼は気にならなかったが、それよりも宮崎新子が、この分では、どうやらすぐには戻ってきそうにもない、と思いはじめていた。これも、彼の経験によるカンである。彼女はどこか別の店に、すでに勤めていて、今日は深夜でないと帰らないにちがいない、と彼は思った。

二

「たしかに、竹川はあの女に支払ったといっている。嘘はつくまい。君は、どうしてあの女が帰るまで、十時間でも、百時間でも、そこに頑張つて、女をつかまえないんだ。君らしくもないじゃないか。そこがあの女の巢であるかぎり、いつかはそこに帰ってくるのはまちがいないんだ。二時間や三時間待ただけで、ひきさがってくるとは、困ったもんだ。そんなことじゃ、おれのところは、君にこの仕事を頼めなくなるぞ」

単なるおどかしであるとはかりも思えない。『ブルー・パレス』のマスターの穴戸は、その

血色のいい頬を、一層、紅潮させて、昂奮した、あたりかまわぬ大声で、どなっている。もっとも、あたりかまわぬといっても、そこは店の事務所であり、マスターのほかに、マネージャーと、三名の女の事務員しかいない。マスターの気短かきには、内部の人間は慣れっこになっていて、またかという顔つきをして、それぞれ、自分の仕事をしているだけである。

山瀬久吉は、さっきから、間歇的に襲ってくる右の後頭部の錐の先でもまれるような疼痛をこらえていた。疼痛はすぐにおさまり、つぎに襲うまでは、けろりとして平靜の状態なのが、ただの偏頭痛にしては、奇妙であった。

「もう一度、出かけろよ。こんどこそ、現金をにぎるまでは、殺されても動かない覚悟で行ってもらいたいな。男がいたからといって、逃げ帰ってくるのは、だらしがないぞ。乱暴したら、告訴という手もある。度胸をきめて行ってくれよ」

別に、相手を恐れて逃げ帰ってきたわけではないが、久吉はまた説明し直すのが、億劫だった。それというのが、もう一度説明しても、自分の考え方を変える穴戸でないことが、彼にはわかっていたからだ。

「この頃、君の成績はひどいじゃないか。ちっとも成果がないようだな。どうかしたのか」
「いいえ、別に」

「そんなら、もっと気合いを入れて、仕事にとっ組んだら、どうだ。まさかこんな状態でいいと思ってるんじゃないだろうな」

「今夜にも、おそく出かけますよ。新子が帰ってきた時分をねらって」
「ほんとに、あの女、よその店へ出てるのかな」

どこの土地の店へ出るにしても、ホステス稼業をつづけているかぎり、必ずそれは知れるは

ずだった。店の女たちの聞きこみや、客の口から、おそいか、早いかのちがいはあっても、それは必ず知れる。それがわかるからこそ、山瀬久吉のようなしよばいがあるわけである。女たちが店を辞めるとき、背負いこんで行った借金をとりたててのだった、そのほとんどは自分の馴染み客の店への借りを、客に代って、店に対して自分が背負いこんだものだった。が、なかには、客からすでに入金済みのものまでとりこんだまま、どこかへ消えてしまう者もあった。その女が、こんどの宮崎新子の場合のように、行先がまったくわからず、探しだすのにさうさん苦労させられることも珍しくはない。

『ブルー・パレス』の女たちの多くは、彼の顔を見知らないはずであった。マネージャーでも、ボーイでもない久吉を、女たちが特別の注意を払って見るわけがないはずであった。ところが、実際には、彼女たちは、みんな、久吉を知っていた。永久に『ブルー・パレス』にいるわけでない以上、いつかは自分たちと利害の対立する相手側の、その一番鋭い先端にいる人間を、彼女たちは動物的な嗅覚でかぎとっていた。彼女たちと口もきかず、青黒い、栄養の悪そうな顔色のとがった横顔を見せて、ときどき、事務所へ出入りする久吉を、彼女たちのほうでは知りすぎるほど知っているようであった。

「マスター、新子がきましたよ」

早出のボーイが、店から宮崎新子をつれてきた。すこし、不便だが、建物の構造上、事務所は店をとおらないではいれなくなっていた。そのかわり、店の空間は、余計なタカリや、寄付強要には、防衛の役目を果していた。

「なに、新子がきた？」

穴戸は思わず声を高めた。男好きのする、しなやかさのあふれた、中肉中背の新子の身体

が、ひっそりと事務所の内部にはいつてきた。店にいるあいだも、ナンバーワンをはりとおしている女だっただけに、歩くときも物静かである。別に、やめたから他所者の遠慮めいた仕種になつたのではなく、勤めているときから、そうだった。

「あたし、竹川さんから、まだお金、もらつてはいませんわ。なんど催促しても支払つてはいただけませんの」

あいさつもそこそこに、新子は自分の立場を釈明した。マスターの穴戸は、半信半疑の面持を向けながら、

「ほんとかい。竹川さんのほうじゃ、支払い済みだといつてゐるんだがね。これは一体、どういう喰いちがいだろう。おい、山瀬、君が出かけて、竹川さん自身の口からよく話を聞いてきてくれ」

久吉はそれに答えようとして、ふとひらきかけた唇の端っこがひきつるような感覚をおぼえた。「おや？」と思ひながら、「ええ、わかりました」と答えたが、舌がもつれて、うまく発音が出来なかった。

穴戸が不審気な顔で見ている前で、久吉は立ちあがつた。左脚が地面にくつついたように重くてうごかない。ようやく、ひっぱがすようにして持ちあげると、そのとたんに身体全体の重心がはずれたのか、思わず前のめりによるめいた。すぐそばで、そんな久吉を見守っていた新子があわてて、彼のかたむく身体をささえてくれたので、倒れずにすんだ。が、彼の半身の不自由は、そのようにして突発的に起きた。

「こりゃ、当分は絶対安静だな。最近、なにか頭でも強く打ったことはないかね」

医者は診断を終えると、黒皮の鞆に血圧測定器をしまい、かわりに注射器をだしながらたずねた。そのもの馴れた医者の手つきを見ながら、久吉は考えるまでもなく、昨日、宮崎新子の部屋の前で、男につきとばされて、後頭部を壁に打ちつけたことを思い浮かべた。

「昨日、そとで、うしろにひっくり返って、こんなところを壁にぶっつけたんですが、モルタル壁なので、そんなに強く打ったという気はしなかったんです。事実、なんでもなく、そのまゝ、帰ってきたんですがね」

「それだ。頭というのは、こわいよ。半歳もしてから、障害があらわれることもあるからな。まあ、多分、軽くすむと思うが、しばらくは起きて動いちゃ、いけないよ。まだ、夜はかなりにひえるから、風邪をひかない用心も肝腎だな」

年寄りの医者は、その言葉を久吉に、というよりも、枕もとにつつましく寄り添っている、という感じの宮崎新子にむかつてのべた。新子を久吉の女房か、愛人とも思いこんでいるのだろう。ところが、新子は新子で、医者のいうことにおとなしくこころもち頭をさげて聞き入っている。久吉はぼんやりと彼女の顔を眺めていたが、次第にはつきりと彼女がそこにいることに気づきはじめた。大げさにいえば、久吉ははじめて、そこに新子を発見したような気持ちだった。不思議なことに、そうしておとなしく頭をさげて、医者の言葉に聞き入っている彼女のたたくまいが、ちっとも不自然でないのだ。

医者は血管拡張剤らしいものを注射すると、部屋を出て行った。あとには、久吉と新子の二人しか残らなかった。そとは、もう暮れかけていて、小さな窓から見える隣家の瓦屋根の上の灰色の空間が、いつのまにか鉛色に変化してきていた。久吉は、「そんなことくらいで、医

者に見せる必要はない。昨夜、飲みすぎでもしたのところがうか。元気をだせば、すぐなおる」といった、さっきの宍戸の太い声を思いだしていた。そのマスターの言葉にさからって、三時間あまりもそのソファに久吉を横たわらせ、そのあと、追いだされるような仕打ちを受けて、久吉の身体を宮崎新子は自分の肩にささえながら、そとにつれだし、タクシーに乗せて、ここに運んでくれたのである。そのあいだ、『ブルー・パレス』の連中は、誰一人として、手を貸してくれる者はいなかった。

「あたしね、自分の父が、脳出血で死んだときを見ていたの。はじめは、なんでもない、ただ、ちょっとした身体のみらつきみたいだったの。それが、脳出血の発作だったわ。だから、あなたの様子を見たとき、これは、とびんと感じたの」

「君はおれに親切にしてくれる理由はないよ」

「あたし、知ってるわ。何故、あなたがこんなことになったか。あのひとは、すぐ、カーッとする、そういう乱暴者なの」

「けれど、君は好きなんだろ？」

「……………」

宮崎新子は答えなかった。答えないということ、はっきりと答えていた。

「君は、店へ出る時間じゃないのか。銀座かね」

この女が、自分に親切を示す気持が、理解できなかった。久吉は改まって彼女に逢うのは、はじめてと喋っている。自分に對する好意からでないのはわかってゐる。同情か。同情なら、眞平御免と喋りたい。女に同情されるなんて、どうにも我慢がならなかった。

「今日は、休むわ」